
デジタルパンク通信 第二十二話

Q 同化でしょうか、多元でしょうか。

A 多元です。

パリ、ジュネーブ、ベルリンと回った。パリではリュクサンブール公園にあるフランス上院のイベントに出席した。フランスの長老あいてに講演するということなので、大上段に構えてみた。「一人勝ちの競争から多元的な共存へ。ハリウッド型の商業表現から、一人ひとりの表現力へ。そう、デジタルはアメリカが生んだ近代兵器でありながら、アメリカ的な機能主義・近代主義を超克するのだ。」

しかし上院議員たちは、もうそんな空疎な議論には関心がない、実践あるのみだ、という。そんなことより、おらが村の役場の情報を住民に公開したり、特産品のアイテムを全欧州に提供したりする手法が大事だ。昔からの確立されたアナログな仕事をデジタルで活性化することに関心がある。自分という確固たるものがあって、それをデジタルで発信するのみだ、と言う。

ジュネーブには国連の諸機関の本部がひしめく。だが、当のスイスはこのほど国民投票でようやく国連に参加することを決定したばかりだ。EUにも参加していない。むろんユーロも使えない。国際社会との独特の距離感を保っている。ドイツ、フランス、イタリアという大国に挟まれて生き抜く知恵なのだろう。簡単に同化しない。しっかりした自分というものがある。そのジュネーブでITU(国際電気通信連合)の内海事務総長にお目にかかった。世界の通信主管庁の総本山のトップとして多忙を極める内海さんが走り回っている案件は、世界情報社会サミット。2003年にジュネーブ、2005年にチュニスで開催される。デジタルデバイドがメインテーマになる。世界の誰もがデジタルの恩恵を受けるにはどうすればいいか。技術を共有しながら、固有の文化や価値観を保つにはどうすればいいか。話が世界に広がると、共通化することよりも、多元性の確保が重要マターとなる。

冷戦と融和の象徴、ベルリンでは、MITのトイ・シンフォニー。ドイツ交響楽団と地元のこども50人が現代音楽を演奏した。布製のボール楽器を押しつぶすことで演奏したり、カタツムリのような装置を叩いてリズムを交換しあったり、パソコン画面でお絵描きするように作曲した作品を演奏したりした。音楽を専門家の世界から取り戻したい。誰でも簡単に演奏できる楽器を作ったり、ネットで参加しながら曲を作るシステムを開発したりする。世界のこどもたちが、それぞれの土着のリズムや音色で表現して、交換して、共有すれば、音楽じたいが変わるかもしれない。それがトイ・シンフォニー構想の狙いだ。少し前、このベルリンで、宮崎駿「千と千尋の神隠し」が金熊賞を獲得した。カンヌの今村昌平「うなぎ」や河瀬直美「萌の朱雀」、ベネチアの北野武「HANA-BI」、いずれも現代ニッポンの土着が国際評価を得ている点が特徴的だ。

デジタルで世界は狭くなって同化するという。それでも世界は多元的で、その多元性は個々の土着が表現することで保たれる。三都市を回って、そう思った。
